

## 『風流志道軒伝』と『根南志具佐』

―成立の先後関係について―

石 上 敏

### はじめに

風来山人平賀源内の出世作となった「風流志道軒伝」と「根南志具佐」（いずれも宝暦十三年十一月の刊記をもつ。以下、場合に応じて「風」「根」と略記）の二作は、実にさまざまな論点から、繰り返し論じられてきた。とりわけ日本古典文学大系の一冊に「風来山人集」（岩波書店、一九六一年）が設けられ、中村彦氏によって詳細極まりない校注が施されて以来、NHKテレビ番組「天下御免」に端を発する七十年代初頭、また博物学ブーム・江戸ブームの中から出現した八十年代後半の両度の源内ブームとも相俟って、源内の小説にも関心が集まった。ここ二十年程の間に、文芸面ではこの二作を中心に多様な論が出されるに至っている。<sup>1</sup>しかし、それほど論の活況にしては、「根南志具佐」「風流志道軒伝」に代表される源内の著作の書誌的な検討は、「風来山人集」以来殆ど閑却視されたままである。

志道軒伝」と「根南志具佐」のいずれが先に書かれたのかを特に書誌的な見地から考察して見ようと思う。<sup>2</sup>

### 一 沿革

これまで「根南志具佐」と「風流志道軒伝」の先後関係については、後に見る通り主に序文の日付によって、また、より強くオリジナリティーが認められるゆえか、「根南志具佐」を第一作と認める傾向が強かったようである。逆に言えば、「風流志道軒伝」が二番煎じと取られる傾向が強かったのである。しかしこれまで「根南志具佐」と「風流志道軒伝」が書かれた順序を専ら考証した研究は存在せず、それは全く推測の域を出ない印象に過ぎなかった。蓋しそれを助長したのは、前者に後編が備わり、源内研究の柱となって来た「平賀源内全集」<sup>3</sup>「風来山人集」<sup>4</sup>いずれもが「根南志具佐」を先に収めたことであつただらう。

なお（引用者注）「根南志具佐」は、序に「宝暦癸未秋九

月」とある故に、同年同時期の奥附をもつ風流志道軒伝に、先立つものと一緒に考えられているが、志道軒伝（注Ⅱ）「風流志道軒伝」の着手の方が早いかと思われることは、同条に述べることとし、通説によって、先ず、（注Ⅱ）「根南志具佐」を先に配することとした。

と明記しておられる。「同条に述べる」というのは、「風流志道軒伝」の解説（解題）で、

その構成にかなり手の込んでいる点、うがちの対象も広範囲にわたり、巧みに配してあるなどから見て、若干の時時をかけた作品ではないかと思われる。前述した如く従来、この作より根南志具佐前編を、その序の日次故に先とするのが通説であるが、執筆は少くとも、本書をもって前とすべきであろうか。名物六帖の中に見える、むつかしい漢字を用いるのが、彼の生涯の癖であるが、この作品には殆ど見えないので、根南志具佐からは絶えることなく続いているなども、その一証になるかも知れない。

と見える部分を指す。中村氏の論拠を整理すると「風」が「根」に先行すると考えられるのは、(1)構成にかなり手が込んでいる。(2)うがちの対象が広範囲にわたり巧みに配してある。(3)よって、若干の時時をかけた作品と思われる。(4)「名物六帖」の中に見える難しい漢字を殆ど用いていない（ただし「根南志具佐」からは絶えることなく続いている）という四点に集約される。(1)(2)は、

志道軒の一代記を描く過程で江戸から異国へと多彩な場面転換が用意されること、異国描写に託して日本の各種の旧弊や権威が穿たれることなどを指しているものと思われる。ただし、これらに関する判断は難しく、反対に「根南志具佐」の方が構成的に複雑で、穿ちが広範に互っているという見方も不可能ではない。しかし次の(3)、「根」より「風」の方が日時をかけた作であろうという推定は、後述の通り、まさにその通りかと思われる。さらに、(4)は極めて客観的な傍証として重要であろう。ただし、中村氏のこの見解以降も従来の「根南志具佐」先行説が覆った様子はなく、むしろ先後関係は等閑視されたままで両者は論じられて来た。しかし、繰り返すがこれは源内の諸作を論ずるに当たり、さらにはその生涯と事蹟を考えるに当たって等閑視してよい問題ではない。問題の所在は板刻の順序ではなく、あくまでも成立の順であり、その意味において、中村氏説のように、私もまた「風流志道軒伝」が「根南志具佐」より先に書かれたと考えるものである。以下にその論拠を述べて行きたい。

## 二 版元

「根南志具佐」「風流志道軒伝」いずれの出版にも、神田白壁町の貸本屋岡本理兵衛が関わっている。しかし岡本の名は「根」「風」と「根無草後編」以外に見ることが出来ず、その正体がわかっていない。また、これらの中では「風」の奥付にのみその名

の見える本屋又七についても、他には『蘆池老話』（明和三年刊）に因る位で、やはり正体不明である。「割印帳」には三作とも載らず、両者の名前を見ることもない。無論これらの出版に因しては岡本が中心であったと考えられ、その意味で岡本に重点を置いて考察するべきであろうが、本屋又七が『根南志具佐』にしからぬ関わらなかつたという点には問題がある（後述）。

神田白壁町といえ、当時源内が居を定めていた町名であり、そのような間柄から岡本が出版を引き受けたという風に考えられてきた。しかし、貸本屋とはいえ、それまでに全く出版と関わったことのない版元が出版を引き受けるにしては、同じ町内という理由だけでは、半紙本五巻五冊という体裁ではリスクが大きすぎると思われる。著者源内はもちろん、序跋を寄せたと考えられている平秩東作・南条山人らの合力があったものとしても、この体裁の本を出すのは素人出版では負担が多すぎるのではないか。

また逆に、岡本がこれらの作で当てたのなら、これら以外の作の出版に乗り出してもよさそうなのである。貸本屋というのだから流通の面でもよぶの素人よりはつづしがきいたであろう。もちろん、『根無草後編』は、『根』が大当たりを取ったことによる続編と考えて間違いないが、それまでには六年の隔たりがあり、この頃、他にも出版物があつていい。造本の様子より見て、岡本はおそらく潤沢な資金をもっていたわけではない。以下に述べるように、本屋又七の合力を得て『風流志道軒伝』の板刻に

入ったものの、『根南志具佐』では又七が撤退した。そして、もし『根南志具佐』の好評がなければ、これらの出版だけで終わっていたのではなかつたか。この間も岡本は続編の執筆を源内に蹴容していたのであろうが、明和元年から五年までの源内の事蹟に照らして、この間源内には物理的に続編の執筆が不可能だったと考えられる。

結局岡本は、『根南志具佐』の好評に助けられて、六年後に『根無草後編』を出版する。しかし、おそらく今度は前編ほどの好評を得ることができず、出版への関与はそのまま止んだものと見てよいだろう。彼は、後に『風来六部集』に収められる源内の小本型の諸作には関わっていないようである。それらの版元は、いずれも春壽堂・清風堂・山釜堂などの仮号に隠れていたが、山釜堂の正体が山崎金兵衛と推定されるように、既存の本屋であつたかと思われる。つまり岡本は源内との関わりを他の出版物に生かすことが出来なかつたのである。

そして、右の拙稿で考察したように、山崎金兵衛が「山釜堂」を用いたのが正体を知られることを憚つたからであるとすれば、岡本利（理）兵衛と本屋又七もまた仮名であつた可能性は皆無ではない。岡本が同年同月の刊記を有する「根」と「風」に利兵衛・理兵衛という二様の表記を用いたのも、これが仮名で、それまでに用いたことがなかつたか、表記を變えることで別人である可能性を含ませたという二つの可能性が考えられないわけではない。

### 三 板下・序跋・戲号

【根南志具佐】の跋は自序・本文と板下の筆跡は同一と見える。漢文序も、同板下と考えてよさそうである。一方の【風流志道軒伝】も、「しい葦干瓢子」の跋まで自序・本文と同じ筆跡である。

いずれの漢文序も彫りの状態はかなり違っているものの同板下と思われる。これらは、すべて大系本解説で中村氏が言われるように源内の板下と見える。さらに【根南志具佐】では源内は見返しの板下（絵を含めて）も引き受けている。ただ、それぞれの間に、どちらが先行するかを窺わせる要素は読み取り難い。以下に、両作の序跋類について比較してみよう。尚、「」内は印記である。

#### 【根南志具佐】

序 宝曆癸未秋九月 黒塚処士 (安達之印・字余曰水虎)

自序 安本元年虚月三十一日 天竺浪人 (風来山人・紙鸞堂)

跋 日付なし 扇放さず山に住む人 (今男之印・玉屋有當)

#### 【風流志道軒伝】

叙 癸未冬日 独鉞山人 (別荘主人・山水有清音)

自序 日付なし 紙鸞堂風来一名天竺浪人(風来之印・裸一貫)

跋 宝曆未の冬 しい葦干瓢子 (滑稽堂・同氣相求)

これらから見る限り、従来言われるように、一見「秋九月」と明記した黒塚処士の序文を備える「根」の方が、いずれも「冬」(十月以降)の叙と跋をもつ【風】より先に成立したと思われる。

ただ、黒塚処士は、印記に「字余曰水虎」と見えるように、水虎山人の号もある源内自身の別名と思われる。それに対して【風】の独鉞山人としい葦干瓢子は他者であると考証されており、これらを自分で書き上げる時間と他者に依頼する時間とを考えれば、「九月」と「冬」の違いは、より僅少なものとなる。極端な話、両者が九月末日と十月朔日であった可能性もあるわけで、これによって「根」が先行することを示す証拠とは厳密には言い難い。

また、これらは印記もすべて異なり、いずれもおそらく手書きで書き付けたものを印らしく彫った戯印と見え、印記を参考にする以上の比較の対象とはならない。さらに、両作の序跋には内容的に呼応する部分はなく、先後関係を語る部分は見出せない。周知の通り、双方の自序は共通する気分によって書かれているが、いずれが先行したとは判じ難いのである。

また、右に見た通り、両書に著された源内の号は異なっている。参考として【根無草後編】を含めて再び列記する。

#### 【根南志具佐】

見返し 紙鸞堂風来画

自序 天竺浪人誌 (風来之印) 【風】とは別物・紙鸞堂

#### 【風流志道軒伝】

自序 紙鸞堂風来一名天竺浪人 (風来之印・裸一貫)

#### 【根無草後編】

自序 風来山人 (古今独歩・我慢坊)

天竺浪人という戲号を源内がこれ以後に用いることはなく、それに対して風来山人は「根無草後編」を含めてこの後も繰り返して用いられて源内の代表的戲号とされるに至る。その意味では、自序に「天竺浪人」を用いた「根」より、「風来山人」を先に持つて来た「風」の方が先に背かれたと見るのが自然であろう。ただし、「根」には見返しに「紙蔭堂風来」と見え、これは当初おそろく袋に用いられたものと思われるから、「風流志道軒伝」初板の袋が見返しが発見されない限り、厳密には比較のしようがない。ただ、それでも署名としていわば最も居住まいを正して書かれるはずの自序末尾に、「根」は「天竺浪人」、「風」は「紙蔭堂風来一名天竺浪人」と源内が署した点は、前者が先行することを示唆していると見てよいだろう。

#### 四 体裁・題簽

兩者を比べた場合、明らかに「風流志道軒伝」の方が丁寧な彫刻である。また、その構成を見ると、

「風流志道軒伝」

叙 半丁六行で二丁

自序 半丁七行で匡郭つきの二丁

口絵 半丁と志道軒自筆の賛の半丁

跋 半丁八行で匡郭つきの二丁

といった具合に、「風」のほうが手の込んだつくりをしている。

「根南志具佐」

半丁八行で二丁

半丁八行で匡郭なしの二丁

口絵なし

半丁八行で匡郭なしの二丁

「根」には注刻を一切欠き、明らかに素人出版の匂いがするのに対して、「風」にはそのような様子は希薄である。

また、題簽を見ても、子持杵を備え普通程度には体裁を整えた「風」と、端に「や」といった目安が残る無杵の「根」という違いがある。即ち、「根南志具佐」に比べて、外見的には「風流志道軒伝」の方が随分丁寧なつくりをしていると見える。

ただ、「風」を通覽して行くと、最終の巻五に至って目に見えて彫刻の作業が粗くなっている。一方、「根」は全体的なつくりは「風」に劣るように見受けられるが、板刻の精粗といった要素は認められない。ここからは、「風」が板行予定に合わせるために最後に急いだことを示しているようにも考えられる。しかしその一方で、単に巻五に至って仕事が粗くなった可能性や職人が代わった可能性も考えられなくはない。見方を換えれば、造本全体の印象として「根南志具佐」には初心さが漂っていると見え、「風流志道軒伝」の方が手慣れた造りであるとも見えるのである。もちろん、体裁のよしあしは飽くまでも印象の問題であり、客観的な根拠とはなり得ない。仮に「風流志道軒伝」の体裁の方が「根南志具佐」のそれより整っていることが明らかであっても、それまでに出版のノウハウのない岡本が、最初の「根南志具佐」では慣れなかったものの、次の「風流志道軒伝」では慣れて体裁を整えることが出来たという考え方も出来る。逆に、以下に述べるとおり、源内が十一月の板行にこだわっていたとしたならば、

後発の「根南志具佐」で急いだ結果、その体裁が「風流志道軒伝」より劣った可能性も考えられる。いずれにしても、確定的な根拠とは言えない。

同様に、内題のすべてが「風流志道軒伝」である「風」に対して、

「根南志具佐」の場合、

「根奈志具佐一之巻」「根南志草一之巻終」

「根南之久佐二之巻」「根南志草二之巻終」

「根奈志具佐三之巻」「根奈志具佐三之巻終」

「根奈志具佐四之巻」「根奈志具佐四之巻終」

「根南志草五之巻」「根南志具佐五之巻大尾」と異なった表記を用いて修辭的配慮を加えている。先に見た題簽についても同様であり、これらは「根南志具佐」が急いで板刻されたという想定とは背馳する要素といえよう。

勿論、これについても、先に見たような初心の現われと見做すことも不可能ではない。いずれにせよ、素人出版同然であったと思われる岡本が板刻から板摺まで一切を行なったと考えるより、少なくとも工程の一部は外注に出したと考える方が自然であろう。そうであれば、「根」と「風」との間にある技術的な差は、それぞれを引き受けた技術者の差と考えられないこともない。

このように、「根南志具佐」と「風流志道軒伝」との体裁、その印象の違いからは、いずれが先に成立したかの確定的な結論は得られそうにない。

## 五 奥付

そこで、次に奥付に注目してみることにしたい。まず「根南志具佐」奥付は、

嗣出書

風流志道軒伝 全部五冊 出来

当世智囊抄 全部五冊 出来

宝曆十三庚未霜月吉辰

江戸神田白壁町

書肆 岡本利兵衛 藏板

というものであり、これに対して「風流志道軒伝」は、

嗣出書

根南志具佐後編 全部五冊 近刻

宝曆十三庚未霜月吉辰

江戸神田白壁町

書肆 岡本理兵衛

同室町三丁目

本屋又七

というものであった。「風来山人集」解説に中村氏が触れられた通り、これらには問題がある。先ず言えることは、「根南志具佐」の嗣出書に「風流志道軒伝」が「出来」として挙がっているが、「風流志道軒伝」には「根南志具佐後編」が「近刻」とあるのだから、常識的に考えればこのとき既に「根南志具佐」は「出来」であったということである。ただし、ここからは、どちらが先んじて板行された（完成した）かは明確ではない。「風流志道軒伝」が板行されたときに「根南志具佐」の続編が予定されていたのは、既に板行されていて評判がよかったか、その内容を讀んだ版元が売れると確信して続編の予告を掲げたかは判断できない。ただ、もし既刊本の評判がよかったというのであれば、「根」ではなく「風」に「根南志具佐後編」の予告が載ったことに一応の説明はつく。

しかし、両者が同じ本屋の店頭に並べられたと考えられる以上、実際に板行時期が異なっているにもかかわらず「宝暦十三庚未霜月吉辰」と同じ刊記を掲げるのは不自然というものであろう。逆に言えば、やはり両作は同時に発売された可能性が高い。

ただ一点、源内が「霜月（十一月）」の刊記を掲げたのは、彼がこれら二作で宝暦十三年の「顔見せ」を趣向したという可能性が考えられる。いずれの作もその内容が芝居や浄瑠璃との関わりを大きくもつことは、既に繰り返し指摘されている通りである。

また源内が九作の浄瑠璃に関わった、当時の江戸を代表する浄瑠

璃作者であったことも周知の通りである。その素養に照らして、彼が公刊最初の二作の芸術的著作で「顔見せ」を趣向した可能性が考えられるのである。見方を変えれば、何か特別な理由がなければ、当時の通例から見て、これらは宝暦十四年（明和元年）の新春刊行とされたのではなかったか。この推定が正しければ、源内は先ず第一に「十一月」という月次が必要だったと考えられる。その場合、実際には同時発売ではなく、売り出しにはいくらかのずれがあったという可能性も生ずる。先に同じ店頭に並べられたと推定したが、ここには岡本と又七という二店が関わっている点、また岡本が古本屋という点も考慮に加える必要もあるだろう。

ところで、両書の奥付を仔細に検討すると、「根南志具佐」の奥付に不自然な箇所のあることに気づかされる。このレイアウトならば左端に寄せて記されてよい「岡本利兵衛蔵板」の文字が、右に寄り過ぎていたのである。言い換えれば、左端の空間が広すぎる。これは、板下の段階で記入されていたもう一軒の本屋の名を完成までの間に急遽削った痕跡と考えられる。その傍証として、「書肆」の文字が、他の文字とは格段に濃く刷り出されている点が挙げられる。これは、当初もう少し左にあったものが、左側を削ったためにバランスが崩れ、その回復のために里木して「岡本利兵衛蔵板」の真上に移動されたものと考えられる。

そうであれば、当初岡本の左側にあった合板者名は本屋又七であったと考えるのが自然であろう。これは、「根南志具佐」が



『風流志道軒伝』以後に完成したことを証する大きな要素となる。名前を削ったのは本屋又七の撤退を示すであろうし、その撤退は『風流志道軒伝』の板行による資金の払底、そうでなくとも何らかの支障が生じたからと考える以外にない。もし「根」の成立が「風」より先んじていたのならば、「根」からは撤退しておき、「風」には関わるという選択は、考えにくいことである。ちなみに、後編も岡本の単独板である。

ただし、この推測は、(1)絶対に「岡本利兵衛蔵板」の左に本屋の名前があり、(2)あったとして、それが「本屋又七」の名であったという二点をクリアしてはじめて成立し得る推測である。さらに、「根」と「風」とが時間的に平行して版刻作業が進められていたとしたならば、あとから成立した「根南志具佐」から撤退したというのではなく「いずれか一方」から撤退したのであり、それがたまたま「根南志具佐」であったという可能性が考えられる。従って、これもまた確定的な証拠とは言えないが、重要な徴証であることは間違いない。右の(1)(2)は、おそらくその通りであったと考られ、そしてそうであればこれは「根南志具佐」が「風流志道軒伝」よりおかれて成立したことを示す大きな傍証となり得る。

## 六 挿絵

両作は、談義本の通例通り、それぞれ複数の挿絵を備えている。一般的に、挿絵から成立の背景が判断できる場合も少なくなく、

今度は挿絵を見ておくことにしたい。絵師の署名は「根無草後編」にあるのみであるが、「根」も「風」も絵師は橋峴江と考えて間違いないと思われる。版下筆跡が中村氏の指摘の通り大部分源内の筆跡と思われると先に記したが、版元や筆工(源内本人)と同様、画工もまた両作を通じて同じ環境内に存在したものと考えてよいであろう。

以下に、『風流志道軒伝』『根南志具佐』の挿絵について通覧しておきたい。挿絵の位置と数に加え、全体に占める挿絵の割合を示す目的で本文最終丁と行数を掲げる。いずれも、本文は半丁十行(一行二十字平均)である。

### 【根南志具佐】

卷一 三ウー四オ、八ウー九オ (二図) 十八オまで三〇二行  
 卷二 八ウー九オ (二図) 十三ウまで二三八行  
 卷三 八ウー九オ (二図) 十四オまで二四五行  
 卷四 六ウー七オ (二図) 十オまで一六一行  
 卷五 三ウー四オ (二図) 十一ウまで一九四行

挿絵合計六図／全六十六丁一一四〇行

### 【風流志道軒伝】

口絵 三オー三ウ (二図)  
 卷一 三ウー四オ、十一ウー十二オ (二図) 十四ウまで三七行  
 卷二 三ウー四オ、九ウー十オ (二図) 十三ウまで二六行  
 卷三 四ウー五オ、九ウー十オ (二図) 十二ウまで一九二行



一巻四 四ウ〜五オ、十一ウ〜十二オ (二圖) 十六ウまで二三七行  
卷五 五ウ〜六オ、十一ウ〜十二オ (二圖) 十六オまで二六二行

口絵・挿絵合計十一圖／全七十一丁一四三行

これを見ると、総行数はほとんど変わらないにもかかわらず、**「根」**が巻一の二圖以外は各巻一圖ずつの挿絵を備えるだけなのに対して、**「風」**は各巻二圖ずつの挿絵に口絵までを備えている。これらが踏襲した談義本の体裁からいえば一巻二圖の**「風」**の方が標準的で、**「根」**は変則的と言えるだろう。しかし逆に談義本に口絵が載る例は珍しく、その点では**「風流志道軒伝」**が変則的と言える。いずれにせよ、この点からも、**「風流志道軒伝」**の方が造本の体裁は整っていると言うことが出来るであろう。

挿絵は、現代の目から見れば、全体的に**「根南志具佐」**の方が上々のつくりをしている。その印象の大半は彫りの違いによるものとも言えようが、**「根」**の方が絵の落ち着きが良いし、**「風」**の場合は被せ彫りのようにしばしばバランスが悪く感じられる。これが何を表わすか、絵師の急ぎの仕事による質の低下ということ、略画風の絵柄から言っても、また岷江がそれほど多忙な絵師であったとは考えられないことから想定しにくい。また、いずれも岷江の画と想定できる以上、慣れ不慣れの問題とは考えにくい。つまり右のような体裁の完備・不備は、**「風流志道軒伝」**に十分な時間があり**「根南志具佐」**に時間が不足していたという推定に掣肘を加えるものではない。

## 七 内容

最後に、中村幸彦氏が**「風流志道軒伝」**先行の論拠とされた本文内審の問題を検討しておく必要があるだろう。

内容から最低限明らかなことは、**「根南志具佐」**が、荻野八重桐が船遊びの最中に溺死した宝暦十三年六月十五日(歌舞伎年表)以降に書き始められたということである。その当日より、**「世の取沙汰」**が「まぢく」に出揃うまでの暫くの期間を経て、逆に言えば**「世の取沙汰」**が未だ冷めぬ程度の時間内に書かれたと考えられる。さらに文中(巻一)に同年七月十三日の中村助五郎の死去について記されるのは、既に書き始められていた草稿に助五郎のことを書き込んだ可能性を想定するより、執筆がこれ以降であったと考えるべきだろう。従って、執筆開始は早くて七月後半、遅くとも序の書かれた九月までと考えられる。序・跋は、必ずしも行事への草稿本に添付されず、審査と平行して書かれることもあったが、本書の場合どうであったかは先述の通り**「割印帳」**に載らないため不明である。

ともあれ、中村氏が**「風」**の**「根」**に先んじる根拠とされた**「若干の日時」**とは、以上見て来た所から、宝暦十三年七月十三日以前から**「風流志道軒伝」**完成までと言いつ換えてよいだろうか。両作を比べて見た場合、確かに**「根南志具佐」**の方にスピード感があり、一気呵成に書き上げたという印象は強い。これに対して、

「風流志道軒伝」の方に落ち着きが認められる。もちろん、これも慣れ・不慣れとして見ることも可能であろうし、もとより印象の範疇に過ぎないのであるが。

### おわりに

「名物六帖」との関わりをはじめとする内部徴証に踏み込む紙幅はもはやないが、書誌的な見地からは、以上見てきたように「風流志道軒伝」と「根南志具佐」との先後関係の問題はかなり微妙で、容易には判断出来ないものであった。

しかし、個々の条件を比較してみると、とくに奥付の様子から中村幸彦氏の推測の通り、「風流志道軒伝」が「根南志具佐」に先行する可能性がより高いと結論づけられるだろう。

さて、この理解によって、「風流志道軒伝」と「根南志具佐」の解釈にどのような変化が生じるか、さらには源内の事蹟を解釈する上でどのような新しい視点が導かれるか、それらについては稿を改めて述べることにしたい。

### 〈注〉

1 一九七〇年代までの源内関係文献については「平賀源内先生二百年祭誌」(同朋彰会、一九七九年)所掲「源内先生に関する文献」が最も詳細なものである。これ以後の研究文献一覧は公表されていないが、点数は二百を下らない。

2 「源内・人參・放屁漢」(『89江戸文学年誌』ベリかん社、一九八九年)、「御櫛」試論」(『新見女子短期大学紀要』15、一九九五年)など。拙著『異装の戯作者——平賀源内肖像考』(和泉書院、一九九八年)巻末に一覧した。

3 このことは、本草学者平賀鳩深によって最初に書かれた長編戯作が「根南志具佐」か「風流志道軒伝」を問うことであるという意味で、源内研究にとって不可欠の問題である。両作の刊された宝暦十三年という年は、これまで源内の生涯で最も注目され、かつ疑問の多い年とされて来た。というのは、二年前の「仕官御櫛」を受けて源内が本草学者から戯作者へ転身したと見ることによって源内の後半生を理解する、いわば「御櫛史観」と結び付けられて来たからである。その意味で、彼が先ずどちらの作を書いたかを知ることが重要な課題となる。

4 元版は、平賀源内先生顕彰会編、一九三二年上巻・三四年下巻。以下、普及版(中文館版、萩原星文館版の二種)が一九三五年、復刻版(名著刊行会版)が一九七〇年と八九年に出されている。

5 「根南志具佐」の自序に「貸本屋」、「後編」の大田南畝の序に「借本屋」と見え、これを疑う根拠はない。

6 朝倉治彦・大和博幸「享保以後」江戸出版書目 新訂版(臨川書房、一九九三年)による。

7 井上隆明「平秩東作の戯作的歳月 付・南条山人年譜」江戸天明文壇形成の側面(角川書店、一九九三年)など参照。

8 「これを隠ぐこと三千部に余れり」と。書肆の歎斜めならず。爰ぞ歌味噌の上どころと。又筆を採て後編を著」云々と「根無草後編」自序に見える。

- 9 この時期は、秩父鉾山への往来が最も頻繁な時期に当たり、「長枕褥合戦」（明治三年成）のほかに、平秩東作の「水の往方」と大田南畝の「褻惚先生文集」に序を寄せた位が、戯文との関わりであった。城福勇「平賀源内の研究」（創元社、一九七六年）など参照のこと。
- 10 拙稿「小本型談義本の背景一斑——山金堂、変じて山益堂と化す」（『国文学』一九九七年九月号）参照。
- 11 注7に同じ。
- 12 拙稿「源内・異界・秋成」（『都大論究』25、一九八八年）参照。
- 13 浄瑠璃との関わりについても、「風采山人集」に中村氏の指摘がある。他には注9の「平賀源内の研究」など参照。
- 14 「蔵板」の文字もまた埋木であった可能性が考えられる。ここが本来は空白であったならば「風流志道軒伝」の奥付とも統一がとれる。ただし確証はなく、指摘のみしておく。
- 15 とりわけ後者は、「画者の署名がないが、橋唄江に似ている」という中村幸彦氏の指摘もあるように、間違いない唄江の画と思われる。前者にしても、この当時の絵師として唄江以上の適任者はいないと、言っておくまい。
- 16 橋唄江は「浮世絵類考」（京伝加筆「追考」）に、「宝暦明和の比、元縫箔師、後世浮世絵師となる、五文字点式、おほく此人の画なり、職人尽の画本に、摺込の彩色を工風して、大に世に行る」（『岩波文庫』）と見える。宝暦末年頃の版本の挿絵や一枚絵は殆ど存在しない。

（いしがみ さとし 大阪商業大学助教授）

研究室受贈図書雑誌目録(二)

- 愛知淑徳大学国語国文（愛知淑徳大学国文学会） 二〇〇
- 葭（山崎勝昭） 二
- アジア・アフリカ言語文化研究（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所） 八八、八九、九〇、九一
- 跡見国文学科報（跡見学園女子大学国文学科） 二二五
- 岩大國語国文研究（岩手大学人文社会科学部「岩大國語国文研究」刊行会） 一
- 岩大語文（岩手大学語文学会） 五
- 魚津シンポジウム（洗足学園魚津短期大学） 一一二
- 宇大國語論究（宇都宮大学国語教育学会） 九
- 歌子（実践女子短期大学国文学科） 五
- 宇部国文研究（宇部短期大学国語国文学会） 二二八
- 愛媛 国文と教育（愛媛大学教育学部国語国文学会） 二二九
- 王朝細流抄（安田女子大学大学院古代中世文学研究会） 一
- 王朝文学研究誌（大阪教育大学大学院古典文学研究室） 八
- 大阪青山短大國文（大阪青山短期大学国文学会） 一三三
- 大阪大学日本学報（大阪大学文学部日本文学研究室） 20周年記念特集号、一六
- 大妻国文（大妻女子大学国文学会） 二二八
- 大妻女子大学紀要（大妻女子大学） 二二九